

「私たちの十五歳の頃」

東日本大震災から5年目に入ります。私たちの住む会津地域には双葉郡から多くの人が避難してきました。私たちは、生まれた土地に育ち住んでいます。いま避難している人には、「ふるさと」はまだまだ遠くにあります。

今回、大熊町地域学習応援協議会の事業として、大熊のみなさんの十五歳のころを聞き書きしました。それは、大熊の子どもたちに地域の事、そこに住んできた「思い」を理解して欲しかったからです。

この事業は、会津大学短期大学部の学生と、特定非営利活動法人寺子屋方丈舎のスタッフが聞き書きを行いました。大熊の子どもたち、そして、地域のみなさんの何らかの記録になれば幸いです。

主催…大熊町地域学習応援協議会

2014年(平成26年度)文部科学省

学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業(委託事業)



語り手
廣島テルさん
(90歳・熊川)

大熊町の戦中戦後

私は大正14年(1925年)、生まれも育ちも大野町。家は農家だけど、集落のほとんどが農家や大工さんだったね。集落の近くが海で、手こぎ舟で漁もやった。家の手伝いをしながら尋常小学校を終わって、2年間裁縫を習った。挺身隊として東京の板橋に行かされて、飛行機の部品をつくる工場で働いたこともあったよ。それでも1、2年間だったかな…。食べるものが

米にアワやヒエ、麦、大根、かぼちやを混ぜた「カデ飯」でしのいできた。これは終戦まで続いたな。でもいよいよよくなって米軍のB29(戦闘機)が5、6機は飛んできた日、熊町は空襲で焼け野原になってしまった…。嫁に来てすぐのことだ。

主人は私が40代の頃亡くなったんだ。子ども3人を農家をしながら育てたよ。いま一緒にいる娘にはずいぶんと手伝わってもらった。米野菜何でも作って、食べる分だけ残して農協に出荷して。梨も作っていた。幸水とか豊水とか。幸水はいちばん甘い。豊水は少し酸っぱかったかね。

梨は夏から秋にかけて出荷するんだけど、実をすぐったり(摘果)冬は枝をしぼったりと手間は一年中。でも大熊の梨は一番だ。戦後はスーパ―も近くにできて便利になったし、熊川の花火は大したものだったよ。いろんな柄があがって。よそからわざわざ観に来る人がいたくらいだも

満足になくって、実家から大豆の煎ったものを持ってきてもらって、少おしずつ食べたんだ。

20歳くらいで隣の熊町の農家に嫁に行ったよ。その頃は太平洋戦争も終わりの頃で、配給制だから嫁入り道具も買えなくてな…。布団こわしてモンペを作ってもらったの。

モンペといえは親戚のおばさんが会津出身で、よく会津木綿の反物を売りに来てな。サッパカマ(会津で野良仕事着)も送ってもらったな。いま、デザインナーの勉強をしてきた孫嫁が、ここで会津木綿のストールづくりに関わっているんだ。

近くに陸軍の飛行場(現在の東京電力福島第一原子力発電所敷地)があつて、勤労奉仕で草刈りにも行つた。空襲警報があると、集落の人たちで手伝わって、飛行機を引っ張って山近くの藪に隠したことがあつた。メチル缶も隠したよ。

金属や農耕馬、米まで供出させられた時代。

の。何でも一番だったよ大熊町は。

海が近かったからね。あの日の津波でなんとか残れたのはわが家も含めて集落の14軒だけ。諏訪神社も流されて何もなくなってしまったの。神社の祭りに使っていた「熊川稚児獅子舞」の道具もぜんぶ。何百年も続いてきた獅子舞は、集落の長男から4人しか選ばれないから、それはそれは誇りだったんだけど。



でも、4年ぶりに復活して嬉しかったよ。うちの孫子も二人踊ったんだ。長男だけでは子どもが揃わないからね。隣の家に道具を保管してあるけれど、これからも伝えていってほしいと思っているよ。